

2007年7月9日

人間科学研究科委員長殿

曹 圭憲氏博士学位申請論文審査報告書

曹 圭憲氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査してきましたが、2007年7月4日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 曹 圭憲

2. 論文題名 「コト八日」の祭祀論的研究
副題 神去来思想による稲作一元論・祖霊一元論を超えて

3. 本文

1) 本論文の構成

本論文はわが国における伝統的な年中行事である「コト八日」の調査研究を通して、日本民俗学の主軸である柳田国男の田の神・山の神の去来思想による、「稲作一元論・祖霊一元論」を再検討すると同時に、この農耕儀礼のもつさまざまな要素を析出して、わが国の基層文化における来訪神・「妖怪」（負の霊的存在）の問題を考察したものである。

まず、序章において、著者は「コト八日」行事が東日本では2月8日と12月8日、西日本では12月8日に集中して営まれていることを指摘し、イエの「コト八日」では、鬼や疫病神、一つ目小僧などの到来を防ぐため、目籠を敷地内に掲げたり、団子・ニンニク・ヒイラギなどを戸口に刺しておくことのみならず、コトの神や田の神・山の神、恵比寿・大黒などに対する神迎えの祭祀、ムラの「コト八日」では、藁人形（＝人形道祖神）を村境に立てたり、風の神送りといった祭祀がみられることに着目し、こうした民俗慣行における神と「妖怪」とのカテゴリー化を行っている。

この言挙げを受けて、第1章で、著者は「コト八日」の研究史を論じ、柳田民俗学の祖霊信仰説が残した課題を取り上げる。柳田やそれを継承した戦後の日本民俗学の定説となっているように、はたして「コト八日」の行事とは、田の神と山の神が交替するという論理（稲作一元論）と、そしてそこから必然的に導かれる田の神＝山の神論理（祖霊一元論）によって営まれているのか。この一元論によれば、恵比寿・大黒といった、必ずしも農耕

とは結びつかない神も田の神と同一視され、一つ目小僧といった妖怪もまた、山の神零落説（柳田）によって、山の神に同化されてしまうのではないか。著者は先行研究が看過してきたそこに疑念を呈する。こうして著者は折口信夫の「依り代」説に注目する。たとえば折口は、「コト八日」における神の依り代としての目籠をして、来訪神の祓禊力を期待するためのものと位置づけ、一部の民俗学者はそれがイエの境界に設けられるところから、「境界的空間」＝「魔除けの儀礼空間」としているが、著者はこの行事はそうした限定されたトポスだけでなく、儀礼空間全体をみることによって、「コト八日」の本来的な姿が立ち現れてくるとする。

《「神」と「妖怪」の分離から何がみえるか——コトハジメ・コトオサメ論再考》と題した第2章は、2月8日と12月8日の1セットで考えられてきた「コト八日」の再考と同時に、「神」と「妖怪」を同質化させた田の神＝山の神論の論証を主題とする。ここではまず、2月8日と12月8日をコトハジメとコトオサメとして、そこに田の神→山の神、山の神→田の神の去来ないし交替をみようとしてきた従来の説を取り上げ、これらの呼称がすぐれて地域的なものであること、両日を農耕儀礼と正月儀礼の結節点としながら、年神への考究がなされてこなかったことなどを指摘した上で、来訪神の祭祀が基本的に屋内での供物奉獻によってなされ、その期日は必ずしも2月、12月の8日ではないことを、各地に事例から明らかにしている。さらに、この両日を「妖怪」が出現するゆえの物忌みの時とする説に対しても、しばしば山の神の零落形とされるこれら「妖怪」の祭祀が、屋外や境界に設けた掲示物を中心に8日に営まれてきた事実を指摘する。こうして著者は、コトハジメとコトオサメの祭祀が田の神（＝農耕期間）と年神（＝正月期間）との交替を意味し、山の神ないしその異形としての「妖怪」（一つ目小僧）が、この時期における物忌みの対象となっているだけでなく、じつはこれを祀れば災厄を鎮めてくれる強い力をもつ来訪神（まれびと）であると結論づける。

第3章は、長野県松本市周辺7集落における「コト八日」祭祀儀礼の現地調査の成果である。これらの集落では、毎年2月8日に、「お八日念仏と足半（大草鞋）」、「お八日の綱引き」、「貧乏神送り」、「風邪の神送り」、「貧乏神・風邪の神送り」などと呼ばれる「コト八日」を営んでいるが、一部呼称から分かるように、そこではこの行事が仏教と習合しており、村人たちは大草鞋ないし、風邪の神や貧乏神に見立てた藁馬や藁人形をこしらえたあと、皆で精進料理を食し（神人共食＝直会）、さらに百万遍念仏の数珠回しを行う。それからこれら作り物を村境に運び、（A）木に吊るしたり（大草鞋）、数珠回しに用いた藁製の龍をやはり村境の道祖神に巻きつける、あるいは（B）お神酒やニンジン、粕汁などを供えたり（藁馬）、南無阿弥陀仏と書いた金剛杖を結びついたり（藁人形）してから川原で焼く（かつては川に捨てた）。著者はこの（A）（B）2類型を「祀り吊るし・巻き」、「祀り捨て・燃やし」と呼ぶ。

一方、イエの木戸先では、2月8日早朝、唐辛子や胡椒、ネギなどの粗穀をまぶしたものを焼くというヌカエブシの行事が行われている。集落によっては、藁で作った大百足を

子供たちが引き回すという「百足引き」もみられるという。

これら一連の「境」の慣行を著者は祭祀・象徴論的に分析し、(A)を来訪神迎え、(B)を祟り神送りという、きわめて独創的な性格づけを行う。すなわち、前者においては足半や大百足、藁馬に乗せられた藁人形、さらにときに藁人形を担ぐ子供たちが神の依り代となり、(B)藁馬が祟り神の化身ないしスケープゴートとなっているという。そして、そのいずれの場合も、境界が祭祀の場となっており、念仏と結びついた「コト八日」は、単に仏教的な死者供養にとどまらず、祟りをなす死霊を宥めるための現世利益的な供養という性格をおびるとする。つまり、祟りや災厄が死霊信仰を基盤とするとすれば、「神迎え」はムラに内在する災厄を鎮めるためであり、「神送り」とはその災厄を（鎮めて）送り出すものだというのである。

第4章《仏教とコト八日——一つ目小僧の呼称と8日の祭日をめぐって》では、これまでの議論を受けて、「コト八日」の祭日である8日の意味や、祭祀対象と揭示物との関係を再検討している。ここではまず、東北地方の事例からイエの祟り神と来訪神、さらに「妖怪」に対する供物や揭示物との関連を詳細に分類し、その分布図も作成されている。それによれば、「コト八日」に訪れるのは、①東北中部では祟り神、②南部および北関東では祟り神・鬼・擬人化、③埼玉・東京～静岡・山梨（いずれも一部地域）では鬼・悪魔であり、これらに対する屋外の揭示物としては、団子や赤飯などの食物類（①・②・③）、目籠類（②・③）、ヒイラギ（③）があるという。また、②の地域では、一つ目小僧の代わりに、一つ目鬼や一つ目疫病神、ダイマナクと呼ばれる「妖怪」が来るとされ、ニンニク（魔除け）と豆腐（本来は祟り神への供物）、目籠（一つ目小僧・来訪神の揭示物ないし依り代）とヒイラギ（魔除け）、目籠と鎌などが揭示物になっているともいう。こうしたことから、著者はとくに②の「コト八日」においては、来訪神・祟り神信仰が希薄化して、魔除け行事としての性格が生成されたとする。

一方、祭日については、灌仏会・花祭りの卯月八日）や山の神の祝日でもある4月8日にも、「コト八日」の呼称で行事を営んでいる地域がある。また、12月8日を仏教的な薬師講や八日講の縁日とする地域もある。では、こうした「コト八日」の暦日や祭祀対象、祭祀法、地域的分布、儀礼空間などの多様性からはたして何が分かるのか。著者はそこに伝統的な「稲作一元論・祖霊一元論」をみるのではなく、祓禊機能・仏教の土着化・山の神信仰との関連をみとめ、一つ目小僧とは山の神の零落した姿というよりは、むしろ歴史的な変遷を遂げた「まれびと」だと位置づける。そして終章では、「コト八日」に対するこれまでの先入観を取り払い、《《神》と「妖怪」を本来の場に取り戻してみると、そこには「コト」と「八日」をめぐる民俗世界の、より広いパースペクティブがひらけてくるといえるのではないか》（終章）とする。

2) 本論文の評価

本論文は、これまで「稲作一元論・祖霊一元論」という柳田学説に甘んじて、論証がほ

とんどなされてこなかった「コト八日」の性格づけを、祭祀・儀礼論や境界論、さらに供物や揭示物、地理的分布といったきわめて多角的な側面から再検討したものであり、その独創性にはまことに目を見張るものがある。实地調査や文献渉猟によって丹念に資料と実例を追い、そこから論述を組み立てる慎重さも見事なものである。また、折口信夫の依り代・「まれびと」論の批判的な援用も、すでにして成熟した研究者の手法を思わせる。たしかに東日本の稲作地帯だけでなく、西日本や陸稲社会での「コト八日」についても考察がほしかったが、むしろこれは過大な要求といえるだろう。外国人学生がわが国のこれほどインテンシブな基層文化研究をなしえたことは、刮目に価する。本論文が斯界に与える影響はきわめて大なるものといえるだろう。

以上のことからして、下記審査委員会は本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分な学問的価値を有するものと判断する。

4. 曹 圭憲氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）早稲田大学	蔵持	不三也
審査員	早稲田大学教授	学術博士（筑波大学）	寒川	恒夫
審査員	早稲田大学教授	博士（人間科学）早稲田大学	店田	廣文
審査員	早稲田大学教授		谷川	章雄
審査員	東京学芸大学准教授		岩田	重則